

資料紹介

後崇光院宸筆物語説話断簡について

解題

翻刻する三獸会合絵、十二類絵詞、説話断簡の類は、昭和廿五年伏見宮家から当部に移譲された図書のうち、融通念仏縁起絵詞(一巻、伏見、長谷寺縁起絵巻(三六七))、粉河寺縁起(巻)、駿牛絵詞(巻)等の紙背に筆録されているものである。

これらの本文は、前、中、後半のいずれかを欠く残欠本か断簡の類である。しかし、これらの紙背筆録の他には所伝をきかない唯一のもの、あるいは先行文献に類話、出典を発見出来るもの、現に民間において、伝承している昔話に類話の存するもの等の区別はあるが、いずれも断簡のためか、従来見過されてきたものであつて、現在全く世に知られていない説話類である。この点今後の中世物語、説話研究上重要な新資料と思われるので、ここに蒐めて紹介する事とした。

これらは表文書、紙背ともに伏見宮貞成親王の御筆であることは、筆致、字体からみて間違いないと思われる。

筆録者の貞成親王とは、伏見宮栄仁親王第一王子、文中元年(一三七〇)三月廿五日御誕生、御兄治仁王薨去後、伏見宮第三世を嗣ぐ。応永卅二年七月五日剃髪、道欽と称し、御子後花園天皇踐祚によつて、文安四年

十一月太上天皇の尊号を受けられる。康正二年(一四五六)八月廿九日崩御(五歳)、後崇光院。看聞御記は応永廿三年から文安五年に互つて記された御手記である。その応永廿三年七月十七日条「伝説雖信用、多聞之説記之、且比興也」、同廿六日条「抑伝説記録雖比興、風聞巷説記之」、また各年次末尾の「宮中雜事、世間巷説、委細記録」等に表示される如く、世俗の巷説、迷信、伝説、出来事を詳しく記録せられ、また、同御記、同紙背「諸物語目録」の記事によれば、数多くの物語、説話、絵巻、縁起等を御覧になり、御手写、御所蔵、御子御花園天皇に進上されている。これは親王が特に伝説、説話、縁起に関心を持つておられた為と思われる。

三獸会合絵詞(残)及説話断簡(融通念仏縁起絵詞紙背)

この残欠・断簡(以下紙背文と称する)は、融通念仏縁起絵詞上巻(首欠)一卷、長谷寺縁起絵詞書(尾欠)一卷の紙背に分れ記されているものである。

紙背文の前半は、融通念仏縁起の料紙に用いられた一卷八枚のうちの三枚がそれに該当する。残り五枚のうち一枚は説話断簡、四枚が具注暦である。用紙は楮斐交漉及楮紙。

卷子本仕立(後補部)の表文書(融通念仏縁起絵詞)第八紙の紙背に「三獸

会合絵」と端作りし、第六紙にかけて紙背三紙に一紙（縦三〇糎、横四五・七糎）十三行、一行十五六字前後で紙背文が筆録され、本文（第六紙）の途中で攔筆して、四行程余白を残す。第五紙は説話断簡、第四紙から第一紙は嘉吉四年^{正月十日}具注曆である。表文書は首部を欠くほか本文に錯簡、脱落はない。

紙背文の書写年次は、御日記に永享九年五月十五日内裏より融通念仏絵両三写を賜わった記事がみえ、融通念仏縁起絵詞に文安二年四月十五日の貞成親王御筆の書写奥書があるから、それ以前には既に筆録されていたことが判る。

本書後半は、長谷寺縁起絵巻一巻の料紙五枚全紙が該当する。用紙は、楮斐交混及楮紙、縦二九・七糎、横四〇・八糎～五九・四糎。本書は一紙に十五～十九行、一行十五六字前後と前半の筆録様式とはほぼ同じである。卷子本仕立（書陵部後補、長谷寺縁起絵巻）の第五紙（表末尾）、第四紙が三獸会合絵詞の後半に当る部分、第三紙は「在なる観成の位に成てし字形に耳をはかけるなり、貴かりし事也」にはじまるが、これは第五紙終りから三行目下部から第四紙にかけての本文と重複、第二紙の「夫混瀆未分の前はし」はこの説話巻頭に該当し、前記の融通念仏縁起の紙背と比較するとその三紙と殆んど重複する。従つて、この長谷寺縁起の紙背文は、本説話の後半に当る第五、四紙のみが、途中が脱落しながら融通念仏縁起の紙背文に連続すると思われ、第三紙は、第五、四紙の部分と重複、第二、一紙は、本説話の前半部と重複していることになる。また、第

一紙につづくべき本紙及び本巻のあるべき本紙は今の所発見出来ない。

本絵詞は、この残欠本の他に所伝しない孤本である。現存の断簡を合せても、本来の姿に復すことは不可能で、その全容については不明。また成立事情、作者、伝来に関しても全く判らない。

内容についてみると、猿と菟と獺が広野に会合して、お互に種性芸能を物語つて、優劣を評判し合う話である。しかし、本書は物語の発端と、猿が種性芸能を語る部分と、物語の後半と思われる一部分を残すのみで、菟、獺の段は散佚しており、現存部分だけでは、この物語の全貌を知る事は甚だ困難である。後半の「彼兎後世得脱を祈り、我出離解脱をも修行せんとおもひて、出家遁世して……」や、「猿の人のまねをする物なれば、部行独覚の修行をもたかはすまなびけるゆへに、五百の猿みな縁覚の菩提をそ証しける……」などから推定して、出離解脱の道を解かんとする発心遁世談の物語ではなからうかと思われる。本書の発端は中世物語、縁起類によくみられる類型的な叙述であり、数人が会合して、物語をする形式は、室町期に成立流行したと目される三人法師、高野物語に類似するところである。本書もこの系統の物語に属する作品と思われる。「三人法師」に登場する人間に対し、猿、獺、菟の動物を登場させるなど、異類物の栄えた室町期の時代性を現している。また、仏教用語を多く用いて、本物語でも中世物語類に散見する流行語の一つである「草木悉皆成仏」の語句も文中にみえ、この時代に共通した仏教的色彩の濃い物語である。

昔話のうちに、猿、菟、獺と同じ三獣が登場する分配譚などが伝わっているが、内容は全く相異している。このような民間伝承説話の三獣の組合せと、本説話の同じ三獣の登場とは、ただ偶然の一致とは思えず、この作者が意識的に民間説話などから素材・方法を摂取したものと思われる。

(説話断簡)

前記したように「融通念仏縁起」第五紙横五二・二種の紙背には十五行、一行十四五字前後で類話、出典不詳の説話「駿河守なる儒者の話」前半部の断篇を収めている。

十二類絵詞(残欠)及説話断簡(粉河寺縁起紙背)

粉河寺縁起一卷は、五十二枚の料紙からなるが、そのうち、縦三〇・三糎、横二・八糎一五八・八糎の楮紙十四枚の紙背には十二類絵詞及説話断簡が筆録される。他の三十七枚は宝徳三年具注暦を反故として用い書写し、一枚は無記入紙である。

紙背文は、一紙一行一十九行、一行十三字一十七字前後、歌二行書、判詞二字下り、表卷子本仕立の粉河寺縁起(装綴は当部の後補)第五十二紙(表の巻尾)が白紙、第五十一の一紙と、第四十八から第四十六に至る三紙は説話断簡、第五十、四十九紙に十二類絵詞の後半部分「狸が鬼形に化るところ」(獸太平記)の後半十四行を記し、六行程余白を残す。十二類絵詞の主体は第四十五紙から第三十八紙にかけて発端の序文から六番右歌上句(文字

が半分より切斷)までを記し、以下を欠いている。第三十七紙以下は宝徳三年正月具注暦である。

書写年次は、粉河寺縁起奥書に「宝徳四年三月日馳筆書写訖、僻字僻書如本也」とあり、御記の「又十二神絵被下、電覽則返進」(永享十・六・八条)「自内裏十二神絵給、室町殿被進云々」(嘉吉元・四・四条)とみえる。従つて、本書がこれによつたとすれば、永享十年から粉河寺縁起奥書宝徳四年八月までの間に書写したことになる。

本紙背文には、題名の記載がないが、御記などの記事から絵巻の詞書と解して、仮に「十二類絵詞」と題した。別名、十二類絵巻、十二類合戦絵、獸太平記、十二支絵巻と呼ばれる。その前半分即ち、狸が恥辱され一門と評定して、夜討せんとする個所だけのものを「十二類歌合」と称せられている。類従本、書陵部本(四五・二)がこの系統に属し、十二支の歌合のみを抄出したものに書陵部本(六五・四・二七・三)、古版本に寛永版(板)獸太平記等がある。十二類絵詞の後半は擬軍記物語であるが、本書は後半の一部(四十六・七)をも存しているから親本は首尾完備した完本であつたろうと推定される。本紙背文は、殆んど後半部を欠いているが、親本と同じく、かつてはほかに完本で存在したものと思われる。

この物語の最古の善本として、絵土佐行広、詞上巻後崇光院、中、下巻青蓮院尊道親王御筆と伝える堂本印象氏蔵の絵巻が伝存しているが、本書の筆跡が後崇光院の宸筆であることは明確であるから、もし堂本氏蔵本の上巻が後崇光院宸筆であることが疑いないものであれば(未見)、

この紙背文と堂本氏蔵の絵巻との関連は深いものであり、この紙背文が、その下書ないしは留書に刻当するものではなからうか。

本紙背文を類従本、書陵部本、猷太平記と比較すると、和歌、判詞は大異ないが、序文の異同は尠くない。ただ堂本氏蔵本との関係は堂本氏蔵本をみる機会がなく本書と比較することが出来なかつたので明らかにしたいが、「国華」五七七号所収の図版によつて、その筆跡を比べると筆致、字体が極めて似ている。この点両本の関係は前記の如きことが推定され、本紙背文は残欠本ではあるが注目に価するものと思われる。

この物語についての成立事情、作者は明らかでない。永享十年六月八日^(看聞御記)以前には成立していた事は確かであるが、室町期は、このような異類物語、つまり「調度歌合」、「鳥獸虫戯歌合物語」など数多く作られ流行したと思われる。倭錦、好古小録、考古画譜に、十二類絵巻の事が散見し、本朝画史の「益継不知世姓、工画、有十二支猷作人間之事業図、画後書云、宝徳三年八月 日、当時土佐家者流乎」の記事の如く、宝徳年間には十二支絵の擬人化が流行した事が知られ、公家の間で歴覧されたことなどから考えて、親王が書写された当時よりあまり遠くない期の成立と思われる。

この十二類絵詞は、異類歌合に擬軍記物語を加味した作品。猷太平記によつて、その梗概を述べれば次の如くである。薬師十二神将の使者である十二支が、八月のある夜、月を題に歌合を催した。その時、鹿が狸を供に其席に参り、鹿が判者となり、十二支達の饗応を受ける。その

後、先夜の興忘れ難く、再び歌合を開催しようとする。又も鹿に依頼したが、辞退し、鹿が歓待された事を羨んでいた狸が判者にならんと押かける。その振舞に十二支が怒り、散々侮辱して追い出す。これを遺憾に思い一門の河瀬守、稻荷山の老狐、熊野の熊と評議し夜討せんとしたが、感知され逆襲にあい惨敗する。しかし、老鷹の意見によつて、十二支が勝利に酔っているところを再び襲い多大の戦果を上げる。しかしながら、また竜始め十二支の勇敢な戦いによつて敗れ、狸が鬼に変して十二支を苦しめんとしたが犬に見破られ、遂に三井寺にて出家浄土の門に入る。本書は序文から歌合の六番和歌までと、狸が黒塚に籠つて鬼に変ずる部分のみを残している。異類物、軍記物、遁世談とを具備へた物語で、このように異類に人間性を持たせて、ここから生ずる滑稽味と、自由奔放に描ける異類に著目し、その中に人間社会を映し出さんとしたもので、この時代の代表的作品と思われる。

(説話断簡)

十二類絵詞のほかに、第五十一紙に「此小児奇得後には君まで聞食めし」の説話後半の一部を記す。六行、一行十二三字前後、四行程余白を残す。第四十八紙に「馬は銭を出して好たる」の「越前国新屋の弥太郎久季宇治川合戦譚」の断篇。十五行、一行十四五字前後、六行程余白を残す。第四十七紙は一行十六字(二・八纏)の断片、内容から推して前話に接続するものと思われる。第四十六紙に「福富草紙」の一部と思われる説話発端部、十四行、一行十四五字前後「…なににかゝへ」

と五行程余白を残し途中で攔筆している。此の様な書さし、重複が、しばしば紙背文書にみられるのは、書写当時の書損じか下書類であつたことを示すものであろうか、前記二つの説話は類話、出典不明である。

説話断簡(駿牛絵詞紙背)

本説話断簡は、駿牛絵詞の料紙紙背に筆録されているものである。一卷二十四紙の料紙のうち十九枚に説話が書かれ、ほかの四枚は消息類、他の一枚は表文書題名を記した元表紙である。用紙は楮紙、縦三〇厘、横一〇・三厘と五〇・五厘と大きさは多種にわたり一定しない。表駿牛絵詞は卷子本仕立(表装は当部の後補)、表文書第六紙と第七紙間、すなわち裏説話(1)と(2)間が脱落している。

本説話は、題名の記載がなく、この紙背と同一説話を所収した伝本をきかないので、どのような説話集の断簡か、その成立事情、作者ともに不詳。各紙の説話は必ずしも、同一話によつて接続しているとは限らない。一応同種の説話を纏めようとした意図はうかがえるが、各紙の接続状況からみて、同一話によつて接続しようとした配慮は認められない。

紙背文は、まずはじめ(表の巻尾に当る)の四枚(第二十四紙より)が消息・女房奉書等、第一紙一枚は「駿牛絵詞」と題した元表紙で、本説話類は第二十紙から第二紙までの十九枚に一紙(大さは多種)一行十五行の間、一行の字数は総じて十三字十八字の間で筆録される。しかし、恋の語源説話(第二十紙)、破鏡説話(第二十八紙)は成巻時、天地が切断されわずかに文字を欠いて、他

の説話に比して文字がやや大きく、筆録様式を異にし、破鏡説話の後半(第五紙)は最初の行間と終りの行間の相違が著しく、一紙に収めようとした形跡がみえる。各紙説話によつては、本文の途中で攔筆したり、何行か余白を残して了つてゐる。こうした紙背文の形態は、書写時の下書か、書さし類を蒐めたことを示していると思われる。

さて、この説話が、何時頃書写されたかは明らかでないが、看聞御記に「自椎野絵二卷借賜、一口物語也、以外古物殊勝絵也、後聞、大覚寺殿御絵云々、宝蔵絵部類也」(元永廿三・六・十三条)の記事、同記紙背文書の諸物語目録(貞成親王御筆)に「一口物語一帖」(元永廿八・十一・十三取目録筆)とあつて、この物語の内容については、他に伝存をきかず、確認する事はむずかしい。しかし、一口噺などから連想して、短い笑話とか、滑稽談の意と解すれば、本説話の内容が、如何にも笑話的であること、しかも、本説話の類話を他に比較すると、比較的短篇である事(五六行で完結する説話)などからして、看聞御記および同紙背諸物語目録の一口物語と本紙背文説話が同一説話と考えられないだろうか。もし推定の如く本説話が一口物語の断簡とすれば、貞成親王の兄弟である椎野より一口物語を借用したのが、元永廿三年六月十三日、所蔵目録の記載が、同廿七年十一月十三日であるから此の間に書写されたことになる。

本説話断簡を集合しても、各説話には復元可能のものもあるが、説話集の原型に戻す事は不可能である。従つて、その体裁全貌を知る事は出来ない。たゞ此の説話類が後述の如く、滑稽味ある笑話の類を採録して

いる点から推定して、これらの説話類の原型は、此の様な滑稽譚の集録を意図した説話集ではなかつたろうか。その意味からすれば、本格的な笑話類を集録したものとして最古のものと言えよう。

本説話の内容は、大体恋の語源説話、破鏡説話、破戒僧の説話、法師と小法師の説話など十話を収める。主として滑稽味ある民間笑話の部類である。

恋の語源説話(1)は他に類話のない唯一の話。天竺の術婆迦童子が后に恋をして、后に逢うためその策略として鯉を奉つて、三年目にやつと目的を達せんとしたが、不覚にも眠つて終い、遂に失敗すると言う滑稽味ある話。恋のため鯉を釣つて奉つたから、これよりこひと云い始めたとする。古来より鯉は恋の掛詞として和歌などに用いられている。本説話に似た話は、「日本書紀」景行紀に「…于泳官、鯉魚浮池、朝夕臨視而戲遊時、弟媛、欲見其鯉魚遊、而密來臨池、天皇則留而通之」と弟媛を得んため、策略として鯉を用いる点である。また、和訓栞には「こひ、鯉も恋より出し名なり」と見える。

破鏡説話(2・8)は、昔より夫婦が別れる時、鏡を破つて、お互がその半分を持つたという故事による話^(鏡神異)。此の話は、先行の「唐物語」に類話がある。唐物語では和歌を挿入し比較的長い物語であるが、本説話は語句文章が、平易簡潔、短篇となつている。説話の結び「たかきをいとひ、いやしきを忍けるもありがたきためしにや」^(本説)「むかしの契をわすれざりけん人よりも、親王の御なさけはなをたぐひあらじや」^(唐物)の

相異は説話の性格を示すものとして注目するべきであろう。

法師と小法師^(和尚と小僧)の説話は、一般に和尚と小僧の話としてよく知られている。小僧が巧智によつて、和尚をやりこめる形式をとつた巧智譚の一種。こうした話は江戸時代に成立し最も流行したものと目されている。『今歳笑』、『出類題』などの噺本、滑稽本には、別話ではあるが、同種の形式による類話を収めている。本説話は、同話を江戸時代の噺本などには発見出来ないが、今も日本各地^(全国的に伝播)の昔話に同一話を伝承している。いわゆる「剃刀の話」(3・16)「馬の落物」(9・15)^(関敬吾著「日本昔話集成」の分類による)と同一の説話で、此の様な「和尚と小僧」の笑話が、当時筆録されていることは、説話の伝承性、口承文芸研究の上貴重な資料的価値をもつものである。このうち「剃刀の話」は先行の「雑談集」上巻卷二に類話を採録している。この話の他、山寺の聖が女のもとに通い、現場を小法師が帰つたふりをして椽の下に隠れ盗聞かれるといういささか猥談めいた説話(5)、逆に小法師が女と寝ようとすると、法師が燈の消えた隣へ行つて火をとつてこいと意地悪する話(6)(後半欠)前者は、昔話「和尚の夜遊」に非常に類似したもので^(昔話では一層卑、猥になつてゐる)、後者は類話、出典がない唯一の説話である。また小法師僧膳の話(10)と同種の説話は「沙石集」^(説話拾遺)小法師利口事にみえるが、同一話はない。前半を欠く断篇。以上が「法師と小法師」と同系統の話である。

破戒僧の説話(14)は、室町の物語「さゝやき竹」、先行の雑談集^(上巻 卷五 信智之徳事)及昔話に類話がある。破戒僧の失敗談。本説話はその後半部のみの断篇

であるが、残存部分から女房の替りに唐櫃に牛を入れられ、法師の奸計が失敗した事が分る。奇抜な著想、鞍馬の毘沙門天信仰等は先行文献と共通する点で、雑談集卷五「フルキ物語、人ゴトニシル事ナレトモ：」

沙石集（第二）「常の物語ナレバ不書之」の記事、現に民間伝承している事実等、説話変遷の過程をみる上興味ある資料である。ほかに前話の前半と思われる断簡と（7）、法師が尼に通う話（14）前半の発端部で筋は不明、以上が紙背に記された全説話である。本説話の「むかし」「これもいまはむかし」「いまはむかしのことにや」の発想は先行諸説話の常套的な手法であり、表現が説話的であることは、先行文献との関連性を示すものと思われる。本説話が、後崇光院自ら巷間に伝承している説話、先行の諸説話集から素材を得て、創作されたものか、一口物語などの先行説話集から書写されたものであるかは、現段階では、資料が乏しく明確にしたい。しかしながら、本説話類が本書のみに伝わる話、民間的色彩の強い伝承的、かつ笑話的で、民間説話との交渉を確認するものであり、これらの説話を後崇光院が興味を持たれ、愛読し、しかも書写された事実は注目されるべき点と思われる。

本書に紹介したもののほか、後崇光院宸筆の説話・物語には、看聞日記卷四十二紙背にある説話断簡「愛宕護山の古狸、老翁に化し犬に見顯さる話」（圖書寮叢刊、看聞日記紙背文書）及宝蔵絵詞下巻の残欠本がある。宝蔵絵詞はその内容から、御記紙背卷十八消息に「…又切部絵の事は、先年或人申しいたし候て紛失して候ほとに」とあつて、紛失した切部絵の絵詞と思

われる。他に所伝しないので翻刻の予定であつたが、意味不詳個所があり、これらを調査の上紹介したいと思う。

凡 例

一、翻刻の際、同一と思われる断簡については、一緒にしたので、便宜各説話断簡の初めに接続順序に従い算用数字で番号を附し、また各紙の終りに「」を附し、現形を示した。但し、重複部分は校合して、その異同を「」に傍注し、漢字と仮名、仮名遣等用字上の相違は之を省略した。

一、原本の漢字、変体仮名は現行の文字に改め、仮名遣はそのままとした。

一、十二類絵詞の和歌二行書は、便宜一行書とし、上下両句の間一字空きとし、判詞は原本のとおり二字下りとした。

一、翻刻本は、私見により句読点を附した。

（石 塚 一 雄）

「三獸会合絵」

(融通念仏縁起絵詞紙背)

(1) 三獸会合絵

夫混濁未分の前は日月星宿もなく、山河大地もなかりき、仏もなく、神もなく、衆生もなければ男女をわかつ事もなし、善惡の業をも造るへき物なければ、因果の不同をもわきまふる事なし、三惡趣の報も引もなく、仏界の果徳をもあらはす事なし、幽々たる虚空無碍無擁なるかなや、闇々たる方所際限得失たれかこれをしらむや、我等はその時は何なる形にて、何事をおもひさらむ、しらむ事こそかなし」^{第八紙}けれ、軽くすめるをは陽として、重く濁れるは陰とかとり、已に天地人となり、黒白善惡の性に迷出しける事こそ無益なれ、爰に或山川の辺の広野に猿と菟と類と行逢て、しるもしらぬもおしなへて、物かたりをそしける、面々に問つ答つ、我種性藝能をたくらへ、優劣を評判しけるに、先猿の云く、我十二神將の其随一にして、西南の方を領する神也、七千の夜叉を眷属にもてり、何者か我荒御前の赤面に肩をならへんや、春は其皮うすしといへとも、秋は万葉充滿して、^{第七紙}「我食物に非ずとはいふ事なし、山林をもて住所とすれば、いつも狭しと思ふ所なし、時／＼狩人にあひて、大狩侯の怖畏こそあれとも、猿を木

にあてゝ打たるやうに、急々如律令のはらひなとをもすれば、彼災難をも払にや、右の手長く、ほしき時は左の手をのふるに不足なし、曉月に叫ぶ巴猿の声、幽人の腸を断すという事なし、又庚申の日など、

(以下欠)

(三行余白)^{第六紙}

(此の間欠)

(長谷寺縁起紙背)

彼菟自身の害を逃れんかために、他を損する罪業、さすかに怖畏^{虫損}せんかたなくおほえて、彼後世得脱をも祈り、我出離解脱をも修行せむとおもひて、出家遁世して、偏に後生菩提の外は、そのいとなみなかりけれども、大道は遠くして行しかたく、兎徑は近くしてふみやすき事、今更に思ひしられぬ、しかれとも頭密の明師にあひにければ、自他法界宮不二の教をきき、草木国土悉皆成仏有性無性齋成仏道の旨をさとれぬ、菟の本所居をわすれず、月宮に還本土して、或は月愛三昧を修し、或は月輪觀を凝して、廿五有の含識を救済するに、照用自在ならずと云事なし、又照鏡三昧に入て、能觀所觀共に一牀自在なる觀成の位に成て、さても彼焼殺す所の猿猴の生所はいつくなるらむと、一定中にしてみそなわしけるに、畜生は殘害の果報難轉の故に、猶生をかへても、又天竺の伊戸迦山と云山に、五百の猿の部党の中に、この猿も生れてそありける、いかゞして彼導引かんと思ひければ、彼菟は部行独覺と成て、伊戸迦山に至て修行しける。此五百の猿常に見

聞して、猿は人のまねをする物なれば、部行独覺の修行をもたかわす
まなひけるゆへに、五百の猿みな縁覺の菩提をそ証しける、部行独覺
は前世声聞なる事、此兎の耳高なる故に、声聞の名言は、声を聞と言
字皆字形に耳をはかけるなり、貴かりし事共也、〔ナシ〕（以下欠）

（二行分余白）
第四紙

「十二類絵詞」

（粉河寺縁起紙背）

⑤ 夫諸仏菩薩の本誓平等なりといへとも、像法転時の利益ことにすくれ
ましますは、薬師の悲願なるへし、衆病悉除身心安樂のちかひ、速証
無上正等菩提の文現当共にたのもしくこそ侍れ、されは釈迦如来は彫
刻して療病院の本尊とし、伝教大師は造立して、天台山の人法をひろ
め給へり、しかのみならず天武天皇は伽藍をたてゝ、宝祚をたもちた
まひ、道昌僧都は靈像をむかへて、法驗をあらはす、参詣帰依の人は
身のうへの厄難をはらい、恭敬供養の「たくひは、心中の願望をみつ、
十二大願偏に衆生の為なれば、十二神将もみな我等をまもり給、かた
しけなしと申もおろかなり、彼の十二神将の使者として、よろつの獸
夜昼の時をまもらんとて、あつまり居てあそひたはふれけるに、この
国のもてあそひなればとて、いさや哥合せむと議しけり、ころは八月
あまりの事なれば、月を題として各詠しける程に、思ひの外なる鹿の
しゝ一頭、たぬきふせいの物をめしくして出来て左右なく横座に着し

て申やう、御哥合の「御会と承候、いかゞ判者なくては候へき、かた
のことく鹿仙の一分にて候へは、判すへきよし種々に申ければ、各興
さめて物いふ事なし、其中に夜の一番の犬すゝみ出てとかめけるは、
我等は薬師の眷属として、十二時をつかさどる御辺は、異類の躰、さ
らにこの砌に望へきにあらす、とくかへりたまへ、若用られすは推参
せんするそ、後悔せらるなと申ければ、鹿もあふなくみえけるを、面
／＼相有てかやうの遊はさのみこそあれ、たゞ判者にして事のやうみ
むと評定して、さらは着座して判し給へとそ申ける、」
一番

第四三紙

左 竜

あまつそらうき辰雲も心して 月をはさらぬよそのむら雨

右 犬

さとの戌の月みる秋の夜半たにも 星まもとや人の思はむ

判云

左の哥、月のためうき雨を心にまかせ侍らん、あらまほしくや、

右の哥、星まもるかとおやまたれん、いと無念にきこゆ、されは

左を勝と申へし、

二番

左 虵

月みれば

第四二紙

月已れはうさもわするゝ秋の夜を なかしとおもふ人やなからむ

右 猪

しなかととりふす亥の床の山かせに 雲もさはらぬ月をみるかな
判云

左の哥、月をみてうきをわすれ、秋の夜をなかしと思はてあかし
侍らん、いとやさし、右の哥、床の山風に雲もさはらぬ月をみん
心もわりなし、されはいつれもわきかたくきこゆ、持とや申へき、
三番

左 馬

あふさかや関のこなたにまち出て よるそこえぬる望月のこ午第四一紙

右 鼠

夜もすから秋のみ空をなかむれば 月の子すみと身はなりぬへし
判云

もち月のこま、月のねすみ、ともにゆへありて、勝劣わきかたし、
これも持とや申へき

四番

左 羊

めくりきて月みる秋に又なりぬ これや未のあゆみなるらむ

右 牛

むら雲の空さたまらぬ月をみて 夜はのしくれを丑とこそ思へ

判云

左の哥、月みる秋をむかへては、まつこれをもてなすへきに、羊

のあゆみ、よにいとほしくきこゆる心ちしておほゆ、右の哥、月
をみて夜半第四〇紙の時雨をかなしむ心まことにやさし、我もぬれてひ
とりなきてこそ侍しか、右を勝とや申へからん、

五番

左 猿

月をのみみやまおろしはしくるとも 空くもら申秋の夜もかな
右 鹿

みるまゝになみた露ちる月にしも 寅ふす野への秋かせのこゑ
判云

左の哥、山かせはしくるとも、月なくもりそかなしみたまふ、
おもひやられてきこゆ、右哥とらふす野へと侍れば、月をみても
ふしけん心、いかゝとおほゆ、されは左を勝とや申へき、

六番

左 鳥

つれなしとゆふつけ西のなくなへに かけほのめかすあり明の月
第三九紙

右 兎

あけかたの月のひかりのしろきうさき（以下欠）
第三八紙

（此の間欠）

(2) 叫かたくおほえて、鬼形に媚て、彼等をたふらかし、心まよひせん時、
十二類をとりていてむと思ひて、黒塚にこもり居て、おもひのまゝに
鬼になりぬ、しほおせたる心地して、十二類集会の所へ趣ける程に、

路にて犬に吠られて、すてにあふなく覺ければ、からくして逃にけり、心うさ」申はかりなし、犬にたにも見しられぬ、まして辰寅などは、さこそすさまじからんすらめとおもひやられて、この企も空しくとまりぬ、（以下欠）

（六行分余白）

第四九紙

説話断簡

（融通念仏縁起絵詞紙背）

(2) 中比出雲路辺に駿河守なる儒者ありけり、門業をつたへて、洪才なりければ、朝家の要極として、ほとなく一国の判史となれり、よろつに付つゝ朝恩にあきみちて、家富宝豊なるにつけては、河原近きすまひ、白浪の恐なきにしもあらず、ありとしあるものみな家の風をあふきつゝ、文花風月をのみたしなみて、いづれも弓箭兵馬の藝におろかなり、石公の一卷の書口には嘲れとも、其武略にたえず、されは寇をふせく謀をしらす、孤城百戦の記、手には翫とも、かの兵法にたへされは、賊をしりそくる力なし、たゞ身のうちの」（以下欠）

第五紙

（粉河寺縁起紙背）

(1) 此小児の奇得、後には君まで聞食めしおよひて、御結縁のために、禁中に召ありて、種々の朝賞にそあつかりける、おほよそ洛中の貴賤こ

そりて是をもてなしけり、

（四行分余白）

第五〇紙

（前半欠）

(3) 馬は銭を出して好たる事なれば、連銭韋毛に乗たく候、弓箭打物などはかはせたまへとそ云ける、盲さ候はゞ、試語てきかせ申さんといひければ、うれしけに多みきけたり、琵琶引よせつゝしらめて、越前国の住人、新屋の弥太郎久季、其日の装束には褐の鎧直垂に、鍬形打たる甲の緒をしめ、金作の太刀をはき、廿四さした切符の箭負、滋藤の弓の真中奉て、連銭韋毛の馬のふとくたくましきに、金伏輪の鞍置て、乗まゝに宇治川の三番と名乗て、真一文字にそ渡しけると語時、この男、目はつかに多みなして、あまりのうれしさに、つい立て内へ入、白布三段」とりいたして、引手物にそしたりける、

第四七紙

第四六紙

(4) 五条わたりに、たかむこの秀武といふ物ありけり、妻男させる事もなかりければ、とし月をふるまで、いとわひしくてなん過ける、九月の中の十日の程に、夜寒にてもねられず、うす綿の衣を中引にひきて、あかしくらすほとに、秀武に妻の云様、この七条にある物は、いかにまれにも、たゞある物はなし、大刀作、銅細工、蒔絵師なり、わぬしは年をふれとも、いといたつらにてことはあめれ、いまはたれも老て、ちかき所のありきたにもえせねは、仏神にもつかうまつらさめり、な

にしにかかへ（以下欠）

（五行分余白）^一

第四五紙

（駿牛絵詞紙背）

(1) むかし、天竺に術婆迦といふ童子ありけり、おもひの外に、時の后を見たてまつりて、いかてとおもふ心つきにけり、人しれす歎つゝあかしくらすに、母、あやしみてとひければ、童子ありのまゝにこたふ、母のいはく、江のほとりに行て、魚をとりて、日こに來れ、我とりつきて、后にたてまつらんといふ、これによりて、鯉を釣て、后にたてまつる事三とせになりぬ、見たまひて逢へきよしを契給に、たよりをえむ事、いとかたければ、はかりことをなしてのたまはく、童子、まつ自在天神にまいりて、その宝殿にかくれをれ、我御幸してあふへし^一と、童子いとうれしとおもひて、まちたてまつるに、夜ふけ、人しつまりてのち、后おはしたるに、童子ね入てしらす、其しるしに、玉のかんさしををきてかへりたまひぬ、こゝに母行て事のやうを尋ぬるに、童子おとろきて、悔かなしむ事かきりなし、すなはち、胸より火もえいてゝ、煙に成て失にけり、かの鯉をつりしによりて、こひといふ事はいひはしめたるなり、

（五行分余白）^一

第一九紙

(2) もろこしに徳言といふ人ありけり、陳氏ときこゆる女にあひくして、

たかひにあさからすおもひかはしつゝふる程に、世中みたれて、たかきもいやしきも山にまとい林にかくれけるに、此人もはなれにけり、

時の親王にておはし^一

第一八紙

(8) ける人、この女のみめかたちすぐれたる事をめてたまひて、又なくおほしたりけれども、徳言の事をのみわすれず、むかしのちきりのことく、鏡のわれをたかひに出して尋けるに、おのつから行逢にけり、其後、いよ／＼おもひしつみたりける^{（也カ）}、親王もたつねきゝ行て、徳言かもとへつかはされにける、たかきをいとひ、いやしきを忍けるもありかたきためしにや、^一

第二紙

（前半欠カ）

(3) かくて物へゆきける道にて、鮎の白干をかひて、昏につゝみて、小法師にもたするとて、これはかうそりそ、あけて^一（以下欠）

第十七紙

（此の間欠カ）

(6) そのゝち、かつら川をわたるとて、鮎のいくらのほりけるをみて、小法師、河中にとりさはきたるけしきにて、やゝ御房あやまちさせ給なといひければ、坊主、こはなに事そとへは、あれ御らむ候へ、いきかうそりのゝほり候に、さはきぎらせたまひ候な、ほしたるにてたに手きり候なる、まして、あら、あふなと、ゆひをさしていへは、行逢たる人きゝてわらひけり、

（四行分余白）^一

第二紙

(前半欠カ)

(9) 或時、又人の請しけるに、小法師をよひよせて、おほくの布施とりはへして、かく世さまもたえ／＼しき事になりゆけは、あさましとは思はぬか、このたひは構ておつる物ひろひもつ事なせそ、たふみすてふありなんと、よく／＼おしへいひていつるに、施主のもとより迎にたひたりける馬すこし物おとろきをしけるほどに、はねおとされぬ、小法師いそぎよりて、やかてふみつけける程に、こはいかにといひけれども、たふみにふむほどに、身もたかひて、たちあかるへきやうもなくて、むなく坊に帰りぬ、さても、いかなりつる事をやといへは、いさよ、落たらむ物をは、ふみつけよと仰事候し^{第一〇紙}かは、前のたひふるまゐそむして、鼻つき候し事のあさましさに、仰のまゝにこそふるまいては候つれといひて、振舞おほせたるかほけしきなり、すへてこの小法師かゆへに、おほくの請用し^{第九紙} (以下欠)

(此の間欠カ)

(10) かりければ、その日の請用も、俄に辞退して、布施もえとらさりけり、

(六行分余白)^{第五紙}

(此の間欠カ)

(11) 其後に、又請用したりけるに、此度は説経雙紙おとさぬやうに、小袋に入て、頭にかけてゆくほどに、道のいたくこちなからぬ所にて、笠をぬきて、時のほど、こ法師にもたせたりけるに、馬のくそをひとつもおとさすうけ入にけり、さる程に、こちなき人のあひけるに、かく

れむとて、もたせたる笠をこひて、あはてきたる程に、馬のくそをさなからあみかつきぬ、こゝろはかりはとりさうそきたりける衣袈裟、みな散／＼によこれて、はれにきつへき様もなかりければ、道より我もとへ帰り、なにくれしける程に、おそく成ければ、施主腹立て、俄に人を請しぬ、からうして行たれとも、そのかひそなかりける、^{第三紙}

(前半欠)

(12) まはりこむさせる小法師、とかになるへきやう候はすといひて、はしりいてむとす、かゝるふしきにあふたにも、おもひの外なるに、此様寺中にきこえなは、身も安穩なるましき事のあさましさに、とりとめて、ことあたらしく、唯にか問へき、いつくの女房が互^(牛カ)にはなりたるそ、不審するほどの事をこそ、人にもとへといへは、唐櫃に入たる事が候はねはこそ牛にはなりて候らめといひければ、坊主わらひけり、大方そのやうをおもふに、女房の一すちに本尊の利生を信しける故に、たのしき武士の妻に成てけり、此僧は、一念の愛念をおこし、人をわうわくしける故に、不思議のめにもあひにけり、^{第一六紙}

(13) ある山寺に聖一人おはしけり、いかなるたよりにかありけむ、女のひとりすみして、あかしくらしける所へ、かよひ物しけるほどに、かの法師、たふ小法師一人めしくして行けり、暁、馬とくいてこよとてかへしけるに、こほうしことのやうおほつかなくおほえて、馬をは墻に

つなきて、椽の下へはいりて、耳をそはたてゝ聞たれば、女房とかたらふをととして、胸よりしたさまへさくりわたすにやあるらむ、色／＼にいふ事ともをきゝて、御房のかくすに聞たるよしいはんする物をと思ひて、ふくし／＼、さすかに帰にけり、

第一五紙

(6) これもいまはむかし、ある山寺法師、小法師をつかあけり、小法師、ある夜となりのめのわらはをかたらひて、かたはらにねたりけるを、師の御房うかゝひみて、いかゝして、うかゝひよらむとおもひて、やれ小法師、御あかしの消たる隣へゆきて、火をとりてこよといひければ、たゝいま、心つきなやと、(以下欠)

(六行分余白)

第一四紙

(7) いまはむかしの事にや、心さしあさからさりけるおとこにをくれて、ひとすちに道心もおこらねは、山林にこもるにもおよはす、むかしのおもかけのみわすれねは、人のとかくいふ事も耳にもいれず、とにかくに思ひわつらひあかしくらす女房ありけり、せめてのおもひのあまりに、鞍馬寺へまいりて、一期のやうをも、多門天王の方便にまかせむとおもひなりてまいりける程に、御堂ちかくなりて、僧の行逢たりけるに、師にたのむ^{第三紙}へきよし、ねんころにちきりぬ、この僧、一目みそめつるより、いさゝか妄念もおこりておほえけるに、あさからしさへちきりければ、いよく心もあられすおほえけり、(以下欠)

(七行分余白)

第二二紙

(前半欠)

(10) かしこにゆきぬれば、まことに僧膳など、ひゝしくてすゝめければ、くそくはよかりけり、小法師の事わすれて残なくくいぬ、事はてぬれば、こ法師にいふやう、いかゝひゝしくもてなさんと思ひたれば、さうあして、そうせんもなかりつるあひた、おろしにおよはす、いかゝせむするといひけるか、口のわきに、御料の一つふ付たりけるを、小法師みつけて、たのみをかけたたりつるおろしはなし、腹のたちのまゝ人の聞けるに、さむ／＼のたてをそしけるはしかましきよ、

(二行分余白)

第八紙

(14) これもいまはむかし、ある法師のしたしかりける尾のほりあつまりて、一条辺に、やとゝりてありけるか、おはせとて、人をおこしたりければ、師の御房あひしりし^{第四紙}、(以下欠)

四は(つ)と重複、四は「はつしにけり」の五文字のみで接続不明ニ付省略。